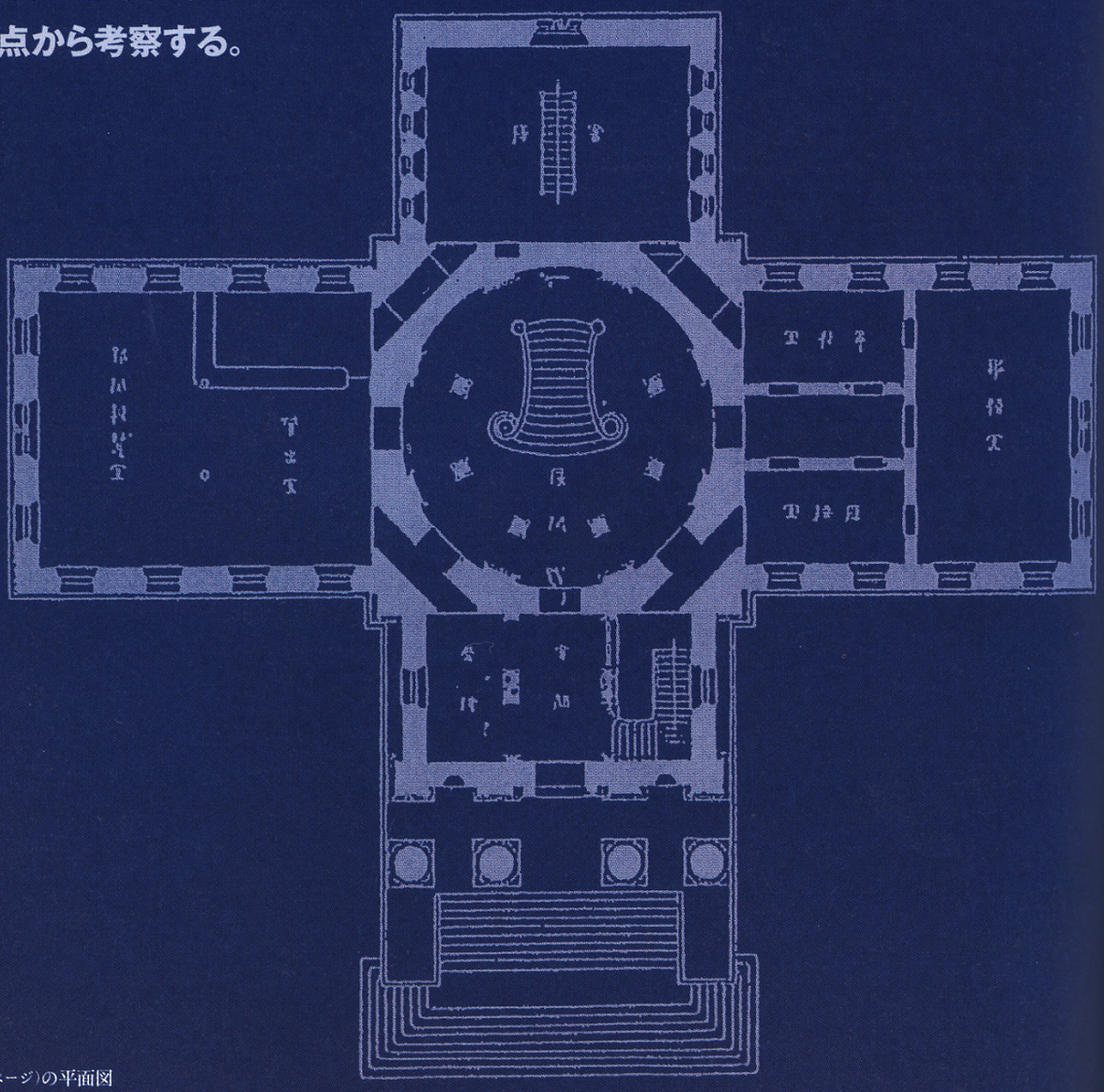
Chapter
02

日建設計って何？
草創期から現在までを複眼で見る

日建設計はどのように誕生したのか？
なぜ1700人の大事務所に発展したのか？
「日建設計らしさ」とは何なのか？
草創期から今日に至るまでを、
さまざまな視点から考察する。



背景は大阪図書館（156ページ）の平面図

23

和田章

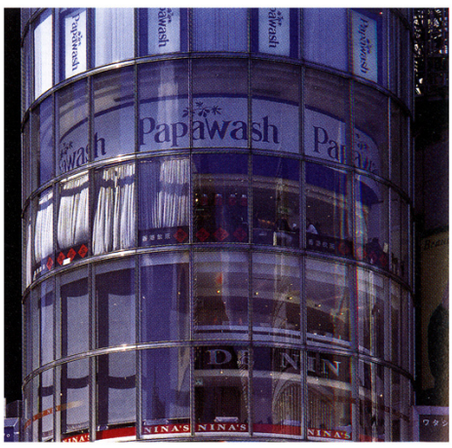
日本建築学会会長、東京工業大学名誉教授

わだ・あきら｜1946年岡山県生まれ。70年－81年まで在籍し、高層建築などの構造解析ソフトの開発を担当した

三愛ドリームセンター［1963］

日建の構造設計の原点

戦後の銀座通りは、小学生だった我々も革靴を履いて出かけるほどの特別で綺麗な街だったが、今でも、高い気品を守っている。日建設計の林昌二さんと矢野克巳さんはこの銀座4丁目にモダンな「三愛ドリームセンター」を設計した。今でも親しまれている素晴らしい建築である。中央のコアーから周辺に向けてドーナツ盤のようにキャンチスラブが出ていて、その外周に巻いた鋼線にポストテンションを入れ、その先端のたわみを抑えている素晴らしい構造だ。コアーは鉄骨鉄筋コンクリート造だが、同じ設計チームで設計された竹橋の「パレスサイドビル」（66年）に併設される2本のエレベータータワーは、こちらの方が高いにもかかわらず、鉄筋コンクリート造だそうだ。構造設計を担当した小林紳也さんにうかがったお話だが、鋼材が非常に高価であった当時を思い出しつつ振り返ると、興味深い。これらの建築に日建設計の原点を感じる。



三愛ドリームセンター［写真：寺尾豊］